

百済と古代枚方の深い関係

今年もまた同じ私がお話しさせていただきますことをお許してください。今日の講演資料は皆さんのお手許にありますか。これまでと違って、この資料の中はかなり詳しく話の内容を書かせて頂きました。これをご覧頂きましたら、もう今日の話は聞かなくてもよいというくらいにまとめさせて頂いております。

さて毎回お話しさせて頂いているのは、このフェスティバルの目的であります「国指定特別史跡・百済寺跡」のことを知って頂きたいということでもあります。全国で61しかない、大阪府では大坂城跡とここの2つしかないという国指定の特別史跡、大坂城は誰でも知っているのに、百済寺跡は枚方市民さえ殆どご存知ないでしょう。最近、発掘調査がまた始まっています、百済寺の建築のすばらしさが確認されておりますが、そんなものがどうしてこの枚方にあるのか、毎回そんなことをお話しさせて頂いているわけですが、今年は、古代においてわが国や枚方と百済との関係がどのようなであったかを少し詳しくお話しさせて頂きたいと思っております。

1. 倭の誕生

(1) 原住民と渡来人

① 日本の原住民

日本列島には歴史時代に入る以前からの原住民がおりました。縄文人です。アイヌ、蝦夷、熊襲などがそうですが、古事記や日本書紀に出てくるナガスネヒコもそうだと思います。脛の長い男ということですが、これは縄文人の身体的特徴をよく表している言葉だと言われます。アイヌ、蝦夷、熊襲などは縄文人ではなくて弥生人のはじめである、縄文人はもっと古い原住民だとの説もありますが、その議論は置いておくことにして、とにかく原住民が広く日本全土で生活していました。蝦夷はアイヌと同族であり、熊襲は南方から渡来した縄文人で、薩摩隼人などと言われる隼人と一緒ではないかと考えられています。

② 半島からの渡来

そんな日本列島へ朝鮮半島からの渡来がありました。半島から壱岐・対馬や沖ノ島などを足場にして来ると、玄界灘は、木をくり抜いた丸木舟でも筏のように木を組んだ舟でも簡単に渡ることが出来ます。潮の流れを利用しますと半島から自然に日本の何処かに辿り着きます。半島の東のほうにある辰韓とか弁韓とかですと、きっと楽東江の下流辺りから船出して、沖ノ島を經由し、響灘から九州の宗像付近から山口県、島根県辺りに到着するでしょう。或いはもっと東のほう丹後半島や能登半島のほうに着くこともあったでしょう。また、西のほうの馬韓からですと対馬・壱岐を經由して、九州の唐津や糸島半島、博多のほうに上陸したでしょう。

いずれにしても、九州北部から裏日本に掛けて半島からの渡来人が多く住み着き、集落を作りました。今裏日本と申しますが、大陸との関係で言えばれっきとした表日本です。その人たちが更に列島の内部に進出し、九州では遠賀川から香春、宇佐などを経て豊後水道から瀬戸内海に入り、河内、倭へと移動して行きました。また出雲から丹後・丹波を經由して近江・山城から倭へ入った行ったルートもあったでしょう。更に、丹後から越・信濃・そして関東地方の各地へと向かった人たちもいたでしょう。

渡来人たちは、製鉄や農耕の技術を持って原住民を巻き込み駆逐して、勢力範囲を拡大して行きました。弥生文化の到来です。その進出は波状的に繰り返されたものですから、縄文人を駆逐した渡来人が、新しくやってきた渡来人にやっつけられるという事態もあったでしょう。このようなこ

とを前提に古事記や日本書紀を見てみますと、それが単に神話というようなものではなく、事実を髣髴させるものとして理解出来るのです。もっとも全てが実話であるというわけではありません。以上の点を踏まえて記紀をよみますと、たいへん分かりやすいということです。

(2) 記紀に表された古代

① スサノオ、ニギハヤヒ、ニニギ

天照大神の弟であるスサノオノミコトは、高天原を追放されて下界に下り、出雲で大蛇退治をします。出雲の神様である大国主命はスサノオの子であるとか7世の孫であるとか言われます。何となく半島の勢力争いに敗れて出雲に流れ着いて、そこを支配したようなイメージがあります。

ニギハヤヒは、磐船で空から登美の峰に舞い降りたとあります。原住民ナガスネヒコの妹を妻としていて、ということは半島から渡来して縄文人と交わっていて、神武天皇がやってくると、さっさとナガスネヒコを殺して神武に降参してまいります。弥生人ニギハヤヒは神武より先にヤマトの登美が丘に入って来ていたけれど、後から来た同族の弥生人に譲歩してしまったようなイメージです。

天孫ニニギノミコト、即ち天照大神の孫は、天から降って高千穂の峰に降り立ちます。天から降ってとか、ニギハヤヒの空から舞い降りてとかというのは、実際はどう考えたらいいのでしょうか。海の水平線を見渡しますと、その水平線のところで天と海とが交わっています。その交わった線のところから船がマストの先の方から姿を現してだんだんと大きくなって近づいてきます。船は水平線上に現れるのですが、あたかも天から降ってくるようにも見えます。天から降ったというのは、海の彼方から来たということに通じるのではないかと考えられます。ニギハヤヒもニニギも海の彼方から来たのです。半島から渡来して来たと考えられます。

余談になりますが、天照大神のおられたタカマガハラというのは一体何処なのでしょう。これを推定させるような場所が半島の伽耶にあります。高霊伽耶というのですが、伽耶の中で最有力な大伽耶と言われた国です。高霊はタカマとも読むことが出来ます。天皇の先祖は伽耶地方から来たことは先ず間違いのないでしょう。

さて、ニニギの子孫が神武天皇です。その実在性はいろいろと議論のあるところですが、10代天皇に崇神天皇という方がおられまして、その名前が神武と同じ「ハツクニシラススメラミコト」というのです。従ってこの二人は同一人物であるとする説が有力です。一人の天皇の事績が二つに分けて書かれているというのです。記紀の記述は神武天皇は神話ですが、崇神天皇はかなり歴史時代的な記述になります。崇神天皇の伯母に倭迹迹日百襲姫(やまとととひももそひめ)がおられますが、この方が魏志倭人伝に出てくる卑弥呼ではないかと言われています。崇神天皇から、垂仁、景行、成務、仲哀と続き、応神へと繋がっていきます。

② 伊香色許売(いががしこめ)

この崇神天皇のお母さんというのが伊香色許売命で、9代開化天皇の皇后です。伊香色許売の父は物部氏の祖であるオオヘソキですが、物部氏はニギハヤヒの子孫と言われています。伊香色許売は開化天皇の皇后になる前に8代孝元天皇の皇后でもあったのです。こんなところから、孝元までの古い王朝が開化に乗っ取られて、崇神によって新王朝が確立したのではないかと見る説もあるようです。即ち物部の王朝が天皇家の王朝に降伏したというわけです。

ところで、われわれの枚方は昔は伊香(いかが)と呼ばれていました。現在伊加賀という字で名前が残っています。枚方の辺りは物部氏の勢力下でありましたから、伊香色許売は枚方の出身者と考えてもいいのではないのでしょうか。あくまでも推測ではありますが、ついでに「シコメ」ですが、普通これは不美人とかちょっとよくない表現と受け止められますが、昔は優れた人とか強い人とかという意味でした。伊香色許売とは、名前というよりも「枚方の別嬪さん」ということですね。

なお、滋賀県に伊香郡（いかぐん）というのがありまして、琵琶湖の北の方です。歴史家は伊香色許売の出身地はそちらだと推測していますが、イカガと言っていないし、ヤマトに近くて物部氏の根拠地であるのは河内ですから、私は枚方説を確信しております。

2. 百済と倭の関わり

（1）百済国の誕生

半島の南部には古くから韓族による部族連合国家がありました。国家というよりも連合体というようなものですが、馬韓、弁韓、辰韓です。北には高句麗があります。その高句麗の温祚が紀元前1世紀の終り頃に馬韓の伯済国に侵入します。そして国家らしい姿を作り上げます。その温祚が百済初代王とされています。その後中国の魏が支配していた帯方郡の一部に組み込まれてしましますが、314年にその帯方郡を高句麗と一緒に滅ぼしてしまいます。資料を見て頂きますと314年頃は、中国は五胡十六国といわれる時代で内戦が打ち続き、とても対外的な手を打てる状態ではありません。そこを高句麗と伯済が突いたわけです。そして346年に近肖古王が都を漢城に移して中央集権国家を立て、「百済」になりました。倭国ではいつ頃かと言いますと、恐らく崇神天皇の時代ではないかと思えます。やはりこの頃倭国もやっと国家の形体を整えつつあったと言えます。この近肖古王は応神天皇のときに王仁博士をわが国に派遣し、論語10巻と千字文をもたらしたという王様です。王仁博士の墓があると伝えられる枚方市としては、馴染み深い王であると言えるでしょう。因みに新羅は百済の後10年して356年に建国しています。

（2）倭国の進出

① 神功皇后・応神天皇

半島でも倭国でも国家の形体が整ってきますと、お互いの行き来も国家的な行事になってしまいます。百済は366年に弁韓の一国である卓淳を通して倭と通交を図ります。神功皇后の時代です。倭は使者シマノスクネを百済に送ります。これが百済と倭の同盟の始まりでして、翌367年には百済と倭の連合軍が新羅に進攻します。371年には高句麗まで進撃します。382年には加羅が新羅に攻められて百済に援軍を求めますが、倭もまた葛城襲津彦を新羅に遣わします。

応神天皇になって391年には、倭は百済、加羅、新羅を破って支配下に置いたと言われます。完全に支配したとは考えにくいのですが、397年の倭・百済同盟によって倭は馬韓地方に大きな勢力を持ったようです。その上で404年には倭軍が漢江を渡って高句麗が支配している帯方に入りますが、高句麗の有名な広開土王によって撃退されます。広開土王は392年から413年まで在位していますが、その功績を讃えて414年に高句麗の都集安に碑が建てられました。集安は鴨緑江中流の北岸にあります。この碑文によって、倭軍の様子を知ることが出来ますが、とにかく倭国は神功皇后・応神天皇の時代を通して半島にかなりの進出をしていたことが分かります。

② 倭の五王

413年に高句麗と共に東晋に朝貢した倭王贊とは誰か、そしてその後南朝に朝貢し続けた倭王の珍、斎、興、武とは誰か、時代的に見て仁徳から雄略までの河内王朝といわれる6人の天皇であろうと定まってはいますが、中国の記録は5人、こちらでは6人ですから特定するのは難しいようです。興は安興、武は雄略ということには異論がないのですが、前の3人をどう割り当てるかいろいろと議論のあるところです。

この5人の王たちが中国南朝に朝貢して、半島における軍事支配権を保証してもらいます。この頃の中国は混乱の時代ですから、その保証がどれ程の意味があったか分かりませんが、とにかく例えば倭王武は478年に宋の順帝から「使持節都督・倭 新羅 任那 加羅 秦韓 慕韓 六国軍事安東

将軍倭王」という、即ち倭国と半島南部の全ての地域の軍事権を持つというお墨付きを貰っています。このお墨付きを振り回してみても、相手の国が素直に従うとは考えられませんが、新興国である日本としては、こんなお墨付きが欲しかったのでしょうか。この6国には百済が入っていませんから、百済は倭国の同盟国として尊重されたのではないのでしょうか。対新羅問題が背景にあるものと思われます。

③ 継体天皇と半島情勢

継体天皇が枚方の樟葉の宮で即位されたのは507年のことでした。来年2007年は丁度1500年記念の年に当たります。この頃百済は武寧王の時代で都は熊津（うんじん）です。今の忠清南道公州に当たります。百済の首都は漢城でしたが475年に高句麗に攻められて、時の蓋鹵王は殺害され、その子文周王が熊津に退いてそこを都にしたのです。武寧王は日本の唐津の沖にある加唐島で生まれており、発掘された王の棺は日本の高野槇で作られていたと言いますから、わが国に馴染み深い王であると言えます。この武寧王は百済の勢力回復のために活躍するのですが、高句麗の進出を防ぐとともに、伽耶に勢力を伸ばしてきた新羅と対決する姿勢を強めます。

そこで武寧王は、馬韓の地に倭国が持っていた権益を百済に譲るよう要求します。倭は百済と同盟関係にあります。新羅とも完全な敵対関係にあるわけではありません。倭の国内には新羅と結んでいる勢力も存在します。恐らく百済はそれが不満で自分の力で新羅に対抗しようとしたのではないのでしょうか。そしてそれが百済の馬韓への積極的な進出に繋がりました。日本書紀はこの事情について、大伴金村による任那4県の割譲、任那2郡の割譲という表現をしています。百済が馬韓地域の榮山江流域や蟾津江流域を確保し、新羅に対する戦略的な強化を図ったこととなります。

継体天皇は、倭の半島での権益の中心である任那、即ち伽耶・加羅の地域を中心にして百済と新羅が争う構図を解決しようとして、527年に近江臣毛野を将軍として6万という大軍を半島に派遣します。しかし、新羅と友好関係にある筑紫国造磐井がこれを阻止しようとして反乱を起こします。天皇は物部麁鹿火などを遣わしてこれを制圧します。そして毛野は2年遅れて529年にやっと任那に進軍し、新羅と伽耶や百済との関係修復を図るのですが成果をあげることが出来ず、帰国の途上で近江臣毛野は死んでしまいます。

その亡骸を迎えるために毛野の妻が枚方までやってきますが、そこで詠んだ歌が日本書紀の中にあります。「ひらかたゆ 笛吹きのおぼる 近江のや 毛野の稚子い 笛吹きのおぼる」というのですが、これが、枚方ということばの初出とされています。

継体天皇はこうして新羅との関係が深かった磐井を駆逐することによって、百済との関係強化を鮮明にするのですが、百済も五教博士を倭に派遣するなどして交流を深めます。しかし、新羅はその後も伽耶・加羅への進出を積極化して、532年には南部伽耶地域の有力な金官伽耶国を併合してしまいます。継体天皇が崩御されたのは丁度この頃です。

これまでお話ししてきますと、半島におけるわが国の力が何となく弱まってきているなどの印象を持たれたのではないかと思います。事実その通りでして、新羅の勢力がだんだんと強大になり百済は守勢に立たされて行きます。538年には聖明王が都を熊津から泗沘に移します。現在の扶余です。聖明王は王都を移転すると同時に倭との関係を更に強化しようとし、その一つとして仏教を伝えています。私たちのように戦前に歴史を習った者は、仏様がイチニ、イチニとやってきたと教えられたあれですが、このイチニイチニ即ち1212年に仏様がやってきたというのは、552年説でありまして、今はそれより前の538年が有力です。

新羅は562年になりますと、伽耶・加羅連合国家の中心として君臨した大伽耶と言われる高霊伽耶を滅ぼしてしまいます。先に天照大神のおられたところとして紹介致しましたあの高霊伽耶です。この結果、わが国が半島で持っていた権益の中心であった任那日本府も滅亡してしまいました。半島での政治的・軍事的な拠点を失ってしまった倭国は、半島への影響力を極度に低下させてしま

ったと言えるでしょう。とは言っても、百済と倭国の利害は新羅に対しましては共通のものがあります。失われた伽耶・加羅での権益、日本流に言えば任那の権益の復興は、両国の共通の課題として残されていることとなります。

3. 百済国の滅亡

(1) 百済と倭

① 豊璋と禪広

その復興に積極的に力を注いだのが百済31代の王である義慈王でした。7世紀に入った642年に義慈王は、新羅の西部となっている伽耶・加羅に侵入して、これを奪取します。王はこの戦争のために背後を固めるべく倭と協定を結びますが、倭としても百済と利害が共通しているわけですから、文句のあろう筈がありません。このとき義慈王は人質として王子豊璋と禪広を差し出します。この禪広がわが国に留まることとなって、それがここ百済寺跡へと繋がっていくベースになるのです。そのあたりの話を続けたいと思います。

② 乙巳の変

磐井の乱の平定によってわが国の新羅に対する関係が途絶えたかと言いますと、そう単純なものではありません。半島で新羅の力が増大すると共に、百済より新羅と友好関係を結ぶ方が得策と考えられるようになるのは必然です。古くから新羅と親密な関係にあった蘇我氏などは、新羅との関係強化で他の豪族よりも地位を強化したとも考えられます。天皇家は百済と親密でしたから、百済の勢力挽回を歓迎していました。

有名な乙巳の変は、表向きには天皇の地位を狙った曾我入鹿を謀殺して蘇我本宗家を滅ぼし、天皇家の地位が確立して行って、孝徳天皇による大化の改新が実現して行ったものと把握されていますが、別の見方もあるようでして、天皇家と藤原氏の百済派、そして曾我氏の新羅派の抗争事件と捉えることも出来るというのです。こんなところから、藤原鎌足は百済の王子豊璋ではないかとの説も出てきます。鎌足は豊璋が百済に帰る頃に姿を消して、百済の再興が失敗した後再び姿を現しますので、このようなことが推測できるのですが、乙巳の変の時期が二人の王子が渡来した数年後のことであり、義慈王が新羅に対する抗争を積極的に行っていた頃ですから、有り得ないことではない気がします。

③ 白村江の戦い

義慈王の反抗を許した新羅でしたが、半島への勢力拡大を意図していた中国の唐は、新羅に協力して百済攻撃に参加します。そして660年には新羅と唐が連合して百済を滅亡させてしまいます。この百済の復興運動を指導したのが、百済王室につながる鬼室福信です。彼は倭国に援軍を要請し、人質として倭にいる豊璋を王に担ぎ出します。当時の天皇は斉明天皇で、後に天智天皇となる中大兄皇子が摂政に当たっておられます。皇子は乙巳の変でも分かるように、百済一辺倒と言ってもよい方です。鎌足の入れ知恵が大きかったかも知れません。

天皇は陸海の大軍を百済に送ります。しかし肝心の百済側に戦略上の不和があり、豊璋が鬼室福信を殺してしまうという事件が起こります。これにより倭軍も戦意を喪失した上に、663年の白村江(はくすきのえ)の戦いで、倭の艦隊によって壊滅的な打撃を蒙ります。こうして百済国は完全に消滅します。因みに白村江ですが、これは日本での呼び方のようで、あちらでは白馬江と呼んでいます。現在の名前は錦江です。公州や扶余を通過して黄海の方へと流れています。

豊璋がこの敗戦によってどうなったかが明らかではありません。そこからも豊璋＝鎌足説が出てくるわけですが、残されている禪広は摂津の難波に移されて百済からの大量の亡命者を受け入れます。

亡命者は、難波だけでなく近江や信濃その他あちこちに定住していくわけですが、この亡命者がわが国に持ち込んだ軍事的、文化的頭脳はこの後の倭国に大きな力を齎すこととなります。

4. 百済王家の興隆

(1) 百済王家の成立

① 百済王禪広

禪広は664年に難波に移っています。そして690年に持統天皇から百済王（くだらのこにきし）という姓を貰っています。もう王様ではないが百済王と名乗ってよろしいという粋な計らいだったでしょう。これによって亡命者たちの中で求心力を得た禪広は、難波において百済の町を建設します。現在JR環状線の寺田町から桃谷付近に掛けてその当時の遺蹟が発見されています。

後に聖武天皇が河内国柏原にある知識寺の大仏を見て大仏建立を決意されますが、知識寺は百済から渡来した人たちがみんなでお金を出し合って建立したお寺です。知識とは、物事を知っているという知識ではなくて、その知識に基づいて寄進する同志のことを指しています。東大寺のような金銅の大仏ではなく、知識寺の大仏は土で出来たいわゆる塑像でしたが、聖武天皇は難波宮から奈良に帰る途中でこの寺を見られ、人々の寄付によって大仏を建立しようと決意されたようです。

② 壬申の乱

天智天皇の子どもである大友皇子と、弟の大海人皇子が皇位継承を争った壬申の乱が672年に勃発しますが、実はこれも百済派と新羅派の争いだという見方があります。この壬申の乱で勝利した大海人皇子が天武天皇となるのですが、この大海人の勝利は天智朝の重臣の中にいた蘇我氏の人たちが寝返った結果だったわけです。蘇我氏の裏切りによって天智の意図は粉碎されてしまいます。天智の側には藤原氏などの百済系の人がありますが、蘇我氏は新羅系です。そうして、新羅系が勝ったのですが、天武天皇の后で天武の次に天皇となった持統天皇は、天智の娘であります。天武は686年に亡くなっていますから、その4年後に禪広は百済王の姓を賜ったこととなります。持統天皇は天武の影響が無くなったのを見計らって禪広を優遇するようになったのではないのでしょうか。

③ 百済王敬福

禪広の曾孫に当たる敬福という人がいます。668年に滅亡した高句麗は、北の方に退いてそこで「渤海」という国を立ち上げました。その渤海国が743年にわが国に国交を持ち掛けてきます。その使節が出羽の国に漂着しまして、使者は24人来たのですが16人が蝦夷に殺されて聖武天皇に謁見できたのはたった8人でした。こんな事もあって、武将として優れた百済王敬福は陸奥介に任命され、更に陸奥守にと昇進します。高句麗と百済の王族は同じ扶余族ですから、こんな点からの配慮もあったかも知れません。

その敬福が陸奥守であったとき、聖武天皇の大仏建立が進行中でした。749年、大仏の鑄造はほぼ完成に近づいたのに、仕上げに使う金が足りません。天皇が悩んでおられたとき、この敬福が金900両を献上しました。仙台の北の方に涌谷というところがありますが、そこで砂金が採れたのです。勿論百済の技術者のたまものでしょう。喜ばれた天皇は敬福を従三位宮内卿河内守に昇進させられて、ここ交野の地を与えられました。いま枚方市中宮ですが当時は交野郡です。そして百済王一族の誰かがここに氏寺を建立することとなったのです。

百済と古代のわが国や枚方との関係についてお話しさせて頂きました。時間の関係で最後の方は駆け足になりましたがお許しください。ご清聴ありがとうございました。